

目次

はしがき……………二

蜻蛉日記……………五

和泉式部日記……………一八

紫式部日記……………三九

更級日記……………三三

讃岐典侍日記……………一〇一

蜻蛉日記

蜻蛉日記は右大将道綱母（陸奥守藤原倫寧の女。藤原兼家の室）の日記である。作者の夫兼家は当時の貴族の習俗に従って、他に藤原仲正の女（これとの間に道隆・道兼・道長・超子・詮子が生まれた）、藤原国章の女、町小路の女、小野宮実頼の召人近江等多くの妻妾を持っていたが、作者は、夫を愛するが故に（兼家も亦明らかに作者を強く愛していた）、その愛からの不安を除こうが為めに愛の独占を執拗に希求して、夫に対して妬み、怨み、焦り、あらがいつづけた。この日記はその苦悶の心境を告白している。記事は天曆八年（九五四）二十六歳の兼家を通い初めて互に和歌を贈答した夢心地の頃から始まり、翌年の道綱の誕生の事、新しい愛人ができて兼家の愛情の薄れゆく次第、そのなげき、鳴滝・初瀬・石山詣のこと、道綱の成長、それに伴う母性のめざめ、兼家が兼忠の女に生まれながらに養女として引取った次第、養女への右馬頭の懸想などを叙し、天延二年（九七四）二十歳になった道綱が賀茂の臨時祭に舞人になつた時の姿を描いて終っている。要するにこの日記は前後二十一年間に亘る夫婦愛の生活の破綻による懊悩を主題として描いたことになる。自叙傳的な強い女性の私小説的作品といふべきものであるが、後半作者が一子道綱に対する母性愛に目覚めて、次第に平静な心境にたどりつく過程にも文芸として注目すべきものがある。書名は上巻の終に「かく年月は積れど、思ふ様にもあらぬ身をし歎けば、声改まるも喜ばしからず、猶物はかなきを思へば、有るか無きかの心ちするかげろふの日記といふべし」とあるのに基く。かげろふは正しくは「陽炎」を当てるべきであろうか。この日記の伝本は、近世をさかのぼるものはないうえに、すこぶる誤脱とおぼしき箇所が多くて、いまだに十分整えられていない。ここでは宮内庁書陵部御蔵本をもととし、上村悦子博士の校本を参考したが、意の通じない箇所については、いちおう諸説によって改めたところも若干ある。ここに抄出したのは、天禄二年（九七一）西山に籠って尼になろうとして果さなかつた時の記事の前半である。

